

ある日、実家から荷物が届いた。

高校三年間の弛まぬ努力が実を結び、現在第一志望の大学に通う私は、実家から離れ一人暮らしをしている。

それなりに炊事も掃除も洗濯も出来ると自負していた私だが、大学のとあるサークルに入ってから、先輩からの飲み誘いが多く、ほとんど家事が出来ていないのが現状だ。そのせいか自室は、県内で五本の指に入るのではないかというほど生活感が溢れている。具体的に言えば、足の踏み場が無いくらいだ。

そんな現状であるから、当然のことながらまともに勉学に励めているわけがない。聞けば、サークルの先輩も現在留年中らしく、サボり癖の延長線が、連日の飲み会のようなのだ。ただ、現在の私もそれを笑える状態ではなく、単位の取得状況が芳しくない。このままでは彼らと同じ轍を踏む結果になりかねない。

「もし留年なんてことになるようなら、お前は大学に向いていないということだ。そうなったなら、早々に大学なんて辞めて職に就け」

実家を出るとき、父に言われた言葉である。『大学に一体どれだけの価値があるのか』だの『大学に行く四年間でどれだけ稼げるか』だのと、父はずっと私が大学に行くことに反対だった。

私はいつもそれに反論していた。『大学では、お金に換えがたい多くの経験や知識が得られるのだから、決して無駄にはならない』と。『大学を卒業したのとしていないのとは、就職の時の印象がまるで違う』とも言った記憶がある。そうして父の反対を受けたまま、私はこうして実家を出たわけだ。

大学に通い始めて、私は決心したことがあった。それは、必ず父を見返すことだ。大学に通うことに対して否定的であった父に、絶対に一泡吹かせてやるのだ、という決意を持って大学生活を送っていた。

だが、現状はどうだ。まともに勉強もせず、まともに単位も取れず、どこが中身のある大学生活であろうか。単位を落とした数が一つや二つであれば巻き返せるだろうが、その逆では目も当てられない。

大学を卒業し、大企業にでも就職すれば、父を見返すことが出来ると信じていた。実際、その為に大学での時間を過ごそうと思っていたことは確かだ。だが、実際のところは進級すら危うい状況である。

そもそも、就職するために卒業するというのもおかしい話だ。それではまるで順序が逆だ。

知らず知らずのうちに大学の意義を見失ってはいないだろうか。

『学校』と銘打つからには、そこは学びのための場所である。それにも関わらず、いつの間にか就職のための準備期間か、あるいは就職を先延ばしにするためのモラトリアムのような存在になってしまっている。

そんな大学への認識の薄さが、こうして形になったのではないのか。このことを、他でもない父は見抜いていたのではないだろうか。

本当にこのまま留年するようならば、父に泣きついて実家で職探してもすればいい。勉強のためにかけた費用なら、きつとすぐに返せるだろう。大学中退という肩書は重い、それこそ努力すれば、そんな肩書きなど眩むに違いない。

大学に疲れているこの頃は、そんな益体もない考えばかりが脳裏を過ぎる。サークルにはほとんど行かず、大学は休みも遅刻もなく通ってはいるが、世間体の為の惰性に過ぎない。長く続かないことは目に見えている。

どうせもってあと数ヶ月だろう。冷静に自分を切り捨てると、形ばかりの大学生活を、カレンダーの日付を追うように続けていた。

そんなある日、実家から荷物が届いた。

夕飯を簡単に済ませ、テレビを見ながらくつろいでいると、安っぽいチャイムが鳴った。出てみれば、特に覚えのない宅配便である。判子を押して受け取ると、差出人は母だった。

「急に仕送りなんてどうしたんだろう」

年の初めに食料品や現金の仕送りはあったので、この時期にくるとは思ってもいなかった。少し早すぎないかと思いつながら箱を開けた。

中に入っていたのは、母お手製の漬け物だ。実家では毎日のように食べていた自家製の漬け物だが、一人暮らしを始めてからは外食や出来合いのものがほとんどのため、こういうものは滅多に口にしない。子供の頃から食べて育ってきた私にとっては、これも立派に『おふくろの味』である。

いくつかの種類がある漬け物のタッパを箱から取り出すと、その下に見慣れない箱が入っていた。漬け物とは別にしたかったようだ。

その箱を取り出して開けてみると、食べ物とは違うものが入っていた。

「これは……」

薄い箱の中に入っていたのは、毛糸で出来た青いマフラーと、同じ毛糸で出来た帽子であった。見るからに手作りのそれは、きつと母が作ったのだろう。

マフラーを手にとってみると、毛糸がちくちくとした肌触りで、少し痛い。模様も何もないシンプルなもので、店の売り物と比べて少し見劣りする。

続けて帽子も箱から取り出すと、その下には紙が敷かれていた。いや、敷かれているというよりは、マフラーや帽子と同様に箱に入れられていたと言った方がいいだろう。

手にとって広げてみると、そこには見慣れた母の字があった。達筆だが読むのに苦勞しないとても綺麗な字だ。手紙に目を通すと、いつも通り母の心配が書き連ねてあった。

病気や食事の心配、都会は物騒だから気をつけるなんてことも書かれている。しかし、いつものことながら学校に関するものは一切書かれていない。

手紙に限った話ではない。母は度々電話を掛けてくれるのだが、その時も学校に関しては一切話題に上らない。最初の頃は信頼されているからだと思っていたが、最近はどうも露骨に避けているような気がしてならない。もしかしなくても気を遣われているのだろうか。

手紙の内容もいつもと同じで、心配事の内容もいつもと一緒だ。ただ、こうして言葉にして心配されているのだと思うと、嬉しい反面、現状が現状なので後ろめたい気持ちにもなってしまう。

読み進めていくと、最後の数行は始めて見る内容だった。

『実は、あなたが実家を出てから、ちゃんと大学に通えているのか、大学になじめているのか心配で、そのことをよくお父さんに相談しているんです。でも、その度にお父さんは『あいつのことだから何の心配もいらぬ。きっと立派になって帰ってくるだろう』って言っているんですよ。ろくに電話も手紙もあなたに寄越さないけれど、それはあなたのことを信じているからなのだと思います。だから、どうかお父さんのことを勘違いしないであげてくださいいね』

心が痛かった。今の自分を省みて、なんと私は愚かなのだろうか、頬を二、三発殴りたかった。

父は、きっと誰よりも私のことを信頼していて、同じだけ私のことを心配してくれているのだ。否定的なだけだと思っていたあの言葉は、不器用な父が私のことを心配して掛けてくれた言葉だったのだろう。

母の気持ちや、筆を執っていない父の気持ちを知らうと、紙の上の文字をなぞっていく。そして、最後に書かれていた言葉に目をやった。

『追伸 冬は寒いだらうと思ひ、マフラーと帽子を編んでみました。少し不格好ですが、もしよかったら使ってください』

もう一度、マフラーと帽子を手を取った。ちくちくと刺す毛糸の感触はあるが、それ以上に、心が温かくなっていくのを感じる。母の気持ちに、直接触れているような感覚だった。

もうすぐ長期休暇だ。時機があれば、実家に一度顔を出してみようかと思った。

「それにしても、今こんなもの送られてもなあ」

マフラーと帽子を持ったまま、風を入れるために窓を開けた。

瞬間。大きな音と、それに続く華やかな色彩。

夜空に咲く大輪の華は、下宿先のアパート近くにある河川敷の花火大会のものだ。歓声と拍手が此処まで届いてくる。花火を見物するには、この部屋は実にお誂え向きであった。

汗ばむようなこの時期に、もう冬の心配をしているのが何とも母らしいと思ひ、手に持った毛糸のマフラーと帽子に苦笑いする。

「今これをつけていくのは厳しいな。しょうがない、取り敢えず冬までは頑張るか」

遠く、向こうの生まれ故郷に思いを馳せながら、暫し河川敷の喧噪に耳を傾けていた。